

地域の課題を考えるプラットフォーム公開勉強会

「みんな」のロームシアター京都をめざして

第1回 みんなの公演って？ーインクルーシブなコンテンツを考える

【第1部ゲストによる事例紹介】

発表① 永山智行さん（劇団こぶく劇場代表・劇作家・演出家）

永山「私たちは、宮崎県三股町（みまたちょう）という人口2万5000人の町の文化会館を拠点にしています。フランチャイズカンパニーとして位置付けられており、町と協力しながらさまざまな作品づくりやワークショップを実施しています。そのひとつが「みやざき◎まあるい劇場」です。この活動がベースになり、現在は広島でも作品づくりをしています。

私は演劇を制作する側の人間として10年以上、障害のある人と関わってきましたが、福祉についてはまったくの素人です。いまだに分かってないこともたくさんありますが、今日は障害のある人と長く関わってきたことで何が見えてきたか、という視点で話をしたいと思います。

「まあるい劇場」が始まるきっかけとなった出来事は、2001年に宮崎の「アートステーションどんこや」という福祉施設（身体に障害のある人たちの芸術文化活動拠点）が主催した、平田オリザさん（劇団青年団）の演劇ワークショップを私が見学したことです。オリザさんはこの時初めて障害のある人とワークショップを行なったそうです。どんこやの当時の事務局長さんが変わった方です。趣味のプロレス雑誌を買おうと書店に行った際に、隣に置いてあった『演劇ぶっく』を立ち読みされたのだそうです。それまでは一切オリザさんの演劇を知らなかったそうですが（笑）、「うちでワークショップをやったら面白そうだ」と直感し、招聘されたそうです。

日程 … 2020年3月2日（月）
ゲスト… 永山智行（劇団こぶく劇場代表・劇作家・演出家）

岡部太郎（一般財団法人たんぼの家 常務理事）
西野桂子（NPO法人音の風 代表理事）
司会 … 長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院助教）
奥山理子（みずのき美術館キュレーター）

「みやざき◎まあるい劇場」での実践

永山「参加者はどんこやメンバーが中心ですが、エイブルアート・オンステージは参加者を公募することが助成条件でしたので、個人の障害のある人も参加されています。身体障害がある人を中心に、知的障害のある人もいらっしやいます。精神障害のある人はワークショップは何度か参加されましたが、本番は不参加でした。

後ほど少し、テレビ番組で取り上げていただいたときの映像を見ていただきます。これは少し悪口になるのですが（笑）、大体メディアで紹介される場合、決まって「障害者の劇団」と紹介されてしまいます。「まあるい劇場」は、参加者を障害者に限定していませんし、劇団ではないのです。障害のある人「も」参加されているし、私の劇団メンバー、宮崎県内で芝居をやっている俳優さんも参加されています。内訳は大体半々くらいでしょうか。

いざ作品が決まったときは、どのように創っていくべきか、かなり悩みました。舞台に向けたワークショップを行なったのですが、ある時こんな印象的なことがありました。言葉を使わずに「落ち込んでいる友達をなぐさめる」というエチュード（即興劇）を行なったときのことです。筋ジストロフィーの参加者で平野今朝市さんという方がいるのですが、彼は電動車椅子でスリットと友達役の女優のところに来て、ギリギリまで近づくんだけど引き返す、もう一度近づいては引き返す、という行動を3〜4回繰り返したんです。そして最後にようやく彼女に近づいて、筋ジスなのであまり手が動かないのですが、それでも一



永山智行氏

生懸命手を伸ばして彼女の手の上にパッと重ねたんです。たっただけでしたが、それを見た時に「ああ、これ以上、足すものはない。これで十分成立しているな」と思ったんです。それで、最終的に決めたのは「普段通りやろう」ということでした。稽古場にきて、ストレッチをして発声練習をして、本読み、立ち稽古…という風に、普段私たちが劇団でやっている通りのプロセスでやろうと決めました。そして最終的に「障害者ががんばりました」と言わせない作品を創ろうと思った。とにかく作品として観客に見せられるものを作る。いろいろ迷ったのですが、最後はシンプルなやり方に立ち返りました。

実際にここで、現場の様子を映像で見ていただきました。2013年に3作品目を作っていたときの取材映像です。

（映像を視聴）

やっぱり「障害者の劇団です」と言っているでしょう、残念ですよ。この作品では死者と生者の境目のない世界を描きました。今せりふを話しているのは、脳性小児麻痺の和田くんです。彼には物語の中心となる9代のおばあさん役をお願いしました。結構こればかりです。彼はある日その体を背負わされ生まれてきたわけですが、彼はすべてを受け入れて生きています。その姿が、最後の時間を生き生きと過ごそうとしているおばあさんと重なる気がしたのです。これは、おばあさんが亡くなった夫と再会する大切なシーンです。舞台上立って、そこでどう生きるか、全身を使って彼が今ここにいることを教えてくれるんですよ。この舞台では障害のある人も、そうでない人も混ざりあって演技をしている。ご覧になった方は最初はびっくりされるかもしれませんが、最後まで通してご覧いただくことで、バラバラの個性が集まる魅力を感じてもらえるのではないかと思います。

それにしても、和田くんは存在感があるでしょう。彼は、他の作品にも出演しています。今、俳優との掛け合いを見ているだけでも、映像には字幕が出ていたから彼のセリフがわかるけれど、実際の舞台では彼のセリフはかなり聞き取りづらい。一方、うちの劇団の俳優たちは、発声も演技もしっかりできて

いるのに、あまり注目してもらえません。だから「まあいい劇場」に参加したうちの俳優は、誰もが敗北感を覚えます。「俺たちのこれまでの厳しいトレーニングは何だったんだ」「なぜ、こんなにも自分たちは見てもらえないんだ」と、みんな一度は絶望するわけです。稽古に來なくなつた役者もいます（笑）。

つまり、「まあいい劇場」に参加すると、「舞台上でどう存在するか？」ということも、俳優たちが演出家の私もつきつづけるんですよ。この先を話すとき長いのですが、この経験をすると「私たち自身の創作も変わっていく」という変化が起きるのです。「まあいい劇場」は「作品を上演すること」がテーマなので、宮崎だけでなく、福島のいわき市とか、広島、福岡、神奈川、鳥取など、いろんな地域をツアーで回って、入場料をとって作品として上演しています。現状では、2014年の上演が最後です。今は次の作品のかたちを模索しているところです。

広島への派生。「ひゅーるぼん」との協業

永山・2014年の広島公演を見て、「広島でも同じ活動をやってみたい」と声を上げたのが広島市のNPO法人「ひゅーるぼん」の代表 川口隆司さん。こちらは子どもの発達支援や障害者アートをサポートされている団体で、知的障害のある人が多い団体です。ここに、地元で舞台制作をされている岩崎きえさん（舞台芸術制作室無色透明主宰）が加わり、私も制作を手伝うことになって始まったのが「おきらく劇場ピロシマ」です。2018年から3年をかけて3作品を作ってきました。

このプロジェクトでは、京都の劇団「鳥丸ストロークロック」の柳沼昭徳さんが脚本を、私が演出を手がけています。3作品とも広島に住むカッパ（広島では「えんこう」といいます）と人間の世界を対比しながら描いたファンタジックな物語。そのえんこうが住む世界が「ピロシマ」で、少し寓話的な設定にしています。

制作の手法は「まあいい劇場」を踏襲しており、障害のある人もない人も一緒になって作品づくりをしています。ここでも「障害者ががんばりました」と訴えるのではなく、作品としての完成度を高めることを目指しています。

発表② 岡部太郎さん（一般財団法人たんぼの家 常務理事）

岡部…「たんぼの家」は、障害のある人の表現活動を社会に発信することを目的とした市民団体です。活動の拠点は「アートセンターHANA」という奈良市内のコミュニティ・アートセンターで、薬師寺や唐招提寺がある西の京地区の閑静な住宅地にあります。「たんぼの家」には組織が3つあり、今日はそのうちの2つをご紹介します。ひとつは、障害のある人の福祉サービズ（就労・生活支援）を手がける「社会福祉法人わたぼうしの会」。障害のある人が日々ここに通い、生活や仕事をされているわけですが、その活動内容のメインがアート活動であることが特徴です。

私が所属しているのは「一般財団法人たんぼの家」といって、障害のある人たちの芸術文化活動の支援を地域を問わず行っています。今日のような勉強会を自分たちで主催することも多く、「障害のある人の日常のアート活動をどう支えたいのか？」をテーマにしたり、今どこで、どんな障害者の芸術活動が行われているのか情報収集をしたり、発信をしたりしています。また、国内外で広くネットワークを作っています。いろんな福祉施設も含め、障害のある人とアート活動をしている団体とゆるくつながりながら、今社会的に障害者をめぐる環境がどんな状態なのかを共有する活動も行っています。福祉の現場と外部の空気感を知っている立場の人が一緒になって、「たんぼの家」を運営しているのが私たちの強みだと感じています。

「たんぼの家」による、パフォーミングアーツの取り組み

岡部…今日はまず、「たんぼの家」が過去に行ってきた「パフォーミングアーツの取り組み」を時系列で紹介したいと思います。最初の活動は1975年、「たんぼの家」と同時期に始まった「わたぼうしプロジェクト」でした。これは、障害のある人の詩に曲をのせて歌う音楽祭です。当時は障害のある人が自己表現をする場が少ないということで、思いを詩に託して

もらい、そこにミュージシャンが曲をつける試みを始めました。私が生まれる前の出来事ですが、障害のある人が舞台の上で表現する環境を創出したことに、大きな意義があったと思います。ここから派生した活動も多く、いまでも全国の小中学校に呼ばれてコンサートを行うこともありますし、国を超え、アジア太平洋地域で音楽祭が行われたりもしました。また、文学にも派生し「わたぼうし文学賞」も誕生しています。言語障害のある人が物語を語り、それを彼らの仕事にする「わたぼうし語り部」という活動にも展開しました。こうした活動が根幹となつて、現在の私たちの芸術支援活動につながっているといっても過言ではありません。

2つ目の活動は、明治安田生命とNPOエイブル・アート・ジャパンによる舞台芸術支援プロジェクト「エイブルアート・オンステージ」への参加です。これは、障害のある人の舞台表現活動を助成するプロジェクトで、2004～08年の5年間で実施されました。私たちも参加団体として、ジャワガムランという楽器を使った『さあトーマス』という作品を制作しました。全国7ヶ所で巡回公演も行いました。これが「たんぼの家」があらためてパフォーミングアーツに力を入れる大きな転機になったと自負しています。

3つ目が、2006年に始まった「カフェ・ガムラン（カフェラン）」という取り組みです。ジャワガムランを使った身体ワークショップで、この活動が、後ほどご紹介する舞踊劇の制作につながるようになりました。

これ以外にも、「たんぼの家」では多彩なアーティストを招いたワークショップを行っています。例えば、書家の川尾朋子さんとジャワ舞踊家の佐久間新（さくましん）さんによる「ブラッシュダンス」というワークショップがあります。大きな紙に墨で字を書いたり、踊ったりするのですが、墨を使うので準備と片付けが一番大変です（笑）。また、知的障害のある人たちを中心に「くらっぶ」という創作演劇グループをつくり、演劇活動も実施しました。演出は演出家のもりながまことさんが手がけています。『ゴドーと待ちながら』や『羅生門』を演じたことでもあります。場面を設定して、それに対して自分たちがどう動くかを、役者たちに問いかけて行っています。もりながまこと

と繰り返しコミュニケーションを重ねた上で、舞台上上がっています。決して場当たり的ではないのですが、結果として、その場で何が起きるかは本人たちにもわからない。実験的というか何的というかわかりませんが、非常に不思議なお芝居になっています。現在、くらっぶは団体としては独立し、精力的に活動しています。



岡部太郎氏

『共創の舞踊劇 だんだんたんぼに夜明かしカエル』の挑戦

岡部…今日のメインとしてご紹介したいのは、『共創の舞踊劇だんだんたんぼに夜明かしカエル』（以下「だんだんたんぼ」という舞台作品（舞踊劇）です。「たんぼの家」の最新の取り組みで、「文化庁平成30年度戦略的芸術文化創造推進事業（共生社会実現のための芸術文化活動の推進）」として、2019年にジャワ舞踊家の佐久間新さんと制作しました。

佐久間さんとの出会いは2004年4月。「たんぼの家」アートセンターHANAの竣工記念パーティーに、佐久

間さんが当時所属していたガムラングループ「マルガサリ（Margasari）」を招いてコンサートをしたことでした。この公演がとても素晴らしかったので、「その後も一緒に何かやりましょう」と意気投合し、前述のエイブルアート・オンステージの活動支援プログラムと一緒に応募して舞台を制作したのです。この時、「たんぼの家」ではなんと、インドネシアからジャワガムランのフルセットを購入しています（笑）。そして、エイブルアート・オンステージのプロジェクトとして、2005年に『さあトーマス』という舞台を制作しました。ジャワガムランを用いた作品なのですが、いわゆる伝統音楽、伝統舞踊ではありません。ほぼ即興に近い形で、舞台上で起こる出来事を等価値にしながら、観客を巻き込んでいく舞台になり、各都市で7公演を行いました。

この公演をとっても面白いと感じた私たちは、公演後に佐久間さん、同じく当時のマルガサリに所属していたほんまなほさんにお声掛けをして、2006年から「たんぼの家」のスタッフ向けのガムランワークショップを開始しました（前述の「カフェラン」）。このポイントは「スタッフ向け」ということです。普通は利用者さん優先で企画を組んでいくと思いますが、私たちがこのとき考えたのは「いろんな実験的な取り組みをしても、スタッフが理解できないことって多いよね」という現実でした。今でも、こうした壁に直面することはあります。運営する私たち自身も、演劇やダンス、音楽など、さまざまなパフォーミングアーツを体験してみること、学んでみる必要だと思っただけです。それで、佐久間さんとのワークショップを毎月2回開催しました。今日のコーディネーターを務めていらっしゃる奥山さんも以前、京都から通って参加してくださいました。みんなで一緒に曲を作ったり、演奏したり、実験的なことを行ってきました。

これを5年間続けた後、2011年から施設の利用者さんのための福祉プログラムとして、佐久間さんのワークショップ「ひるのダンス」をスタートしました。こちらも月2回、7～8年をかけて継続して行なってきたのですが、この活動を通して私たちスタッフは何度も「ダンスが生まれる瞬間」を目撃することとなりました。障害のある人自身も、彼らをケアする人も、

ここに飛び入りで参加したゲストや舞台関係者の人も、それぞ
れの新しい発見があるのです。それらの発見を「ひるのダンス」
に参加していた研究者や現場スタッフが中心となつて、『ダンス
が生まれる回路研究プロジェクト』という報告書（2018年）
にまとめました。ここには、参加者たちの素直なインタビュー
を掲載しています。ケアする側の人にとつて「どんな変化や発
見があったか」についても書いてあるので、ぜひ読んでみてく
ださい。佐久間さんのワークショップでは、障害のある人にとつ
て身近な人たちが「障害者の普段とは違う魅力を見出す」機
会にもなつたと感じています。

そして、この研究報告と前後するようにはじめたのが『共創
の舞踊劇 だんだんぼに夜明かしカエル』（2019年）の
公演でした。文化庁事業でまとまつた予算がとれたこともあり、
佐久間さんと2011年から続けてきた障害のある人とのワー
クショップの作品化を試みたのです。とはいえ、いきなり作品
を作つたのではなく、まずは「たんぼの家」を含めた関西の
3カ所で、「共創ワークショップ」を開催することから始めま
した。共創とは何かというと、これまで「たんぼの家」でやっ
てきたことを、「園の外に出してやってみよう」という試みです。
1カ所目は、子どもさんと親御さんと一緒に踊るワーク
ショップとして、2カ所目は近隣の障害者施設の利用者さんを
招いたワークショップとして行いました。3カ所目は、大阪・
池田の「ほほえみの園」という高齢者施設の利用者さんと、そ
こで働く、近年増えているインドネシア人の介護職の方を招い
て行いました。佐久間さんがインドネシアとの関わりが深いこ
とも、実施理由のひとつでした。この時、私たちの取り組みを
外に出すと同時に、共創する他のコミュニティの中で行われて
いる楽しい遊びやコミュニケーション方法を取り入れること
も試みました。いわばそれぞれの「文化の交換」みたいなこと
をしたわけです。これらを経たうえで、作品づくりを行いました
。

本公演は、兵庫と東京で公演を行いました。「たんぼの家」
のメンバーやワークショップに参加してくれたお子さんも出演
しています。東京公演では、この時は「だじゃれ音楽研究会」（音
楽家 野村誠さんを中心に活動する音楽団。東京都足立区千住地

域の人たちを巻き込み、気軽にだじゃれを言い合い、そこから
音楽を生み出していくプロジェクト）という面白い集団にも参
加していただき、舞台を作りました。

（映像を視聴）

この舞台はカエルの世界の話です。相撲をしているシーンで
は、カエルたちの相撲の行司役が知的障害のある人で、それ以
外の方は全員カエルです。3つの田んぼがあり、時間軸に沿っ
ているんな場面が挿入されていきます。この場面ではカエルの
軍団同士の間で、佐久間さんも一人の演者として舞台上に
がっています。

こちらは、「ワヤン（ワヤン・クリ）」と呼ばれるインドネシ
アの人形を用いた伝統的な影絵芝居を使ったシーンです。歌を
歌っているのは、ほんまなほさん。車椅子の女性（山口広子さん）
のライブストーリーに歌と音楽を乗せて、ほんまさんが歌って
いるのです。先ほどはカエルの世界の話でしたが、ここでは人
間世界の話が変わっていて、影絵の人形芝居に山口さんの想い
を託しています。続くシーンは、山口さんと佐久間さんによるダ
ンスです。山口さんは車椅子ユーザーですが、車椅子を使わな
いダンスに挑戦しています。最後のシーンはカオス（混沌）で
す。即興ダンスと音楽が混じり合いながらエンディングを迎え
ます。YouTubeに公演のダイジェスト版をアップしている
ので、ぜひご覧になってみてください。

私が、佐久間さんについて面白いなあと思うのは、ダンスの
解釈の幅が非常に広いことです。ほとんどその場にはいない人
も、ダンスをしていると風に解釈されている。例えばこの映像
には、扉を半分開けて眺めているだけの女の子が映っているの
ですが、「彼女が1年の間に、室内に入って部屋の隅に移動した」
というだけで、参加した、ダンスをしたと解釈しているのです。
体を動かすことだけでなく「ともにその場にいる」ことであ
るとか、視線、コミュニケーションのさまざまな形を引き出し
て、その人らしい「ダンス」を見つけていく。佐久間さんの姿
勢には学ぶものが多いと感じています。決して同じ踊りをする
必要はなくて、「その人らしいダンスを見つけていくプロセス」

を大切にしているんです。

また、この舞台はかなり大掛かりで、野村誠さんや砂連尾理
（じゃれお おさむ）さんなど、いわゆる百戦錬磨のプロもたく
さん参加してくださっていますが、その軸にあるのは、「たんぼ
の家」で長年取り組んできた成果です。最初から公演を作る
うとして始めたわけではなく、長年続けてきて、蓄積したもの
をいかに人に見せる（魅せる）かということへの挑戦だったと
思います。

【質疑応答】

奥山…ありがとうございます。私自身は本公演を見られな
かったのですが、スタッフ向けのワークショップを始められた
初期の頃に参加し、活動の一端にふれさせていただいた経験が
あります。その立場からというと（舞台作品としてお披露目する）
この日がくるんだなあ」という驚きがあった一方、「いつか公
になる日がくるのだろうか」という予感が現実になった喜び
もあります。私が体験したワークショップの時間は、豊かな発
見と身体的解放の連続であつたと思つているので、本当に感慨
深いですね。ワークショップとして始まつたものが、こういう
プロセスを辿れた（舞台作品化できた）という稀なケースだと
も思います。

岡部さんが最後に「当初の目的はあくまでワークショップで
あり、公演が最終目的ではなかった」とおっしゃっていました
が、それゆえに公演としてアウトプットするための最後の調整
やご苦労はさぞ大きかつたのではないかと思います。その過程
で印象的だった佐久間さんとのやりとりや、みなさんのご判断
があれば教えていただけませんか。

岡部…舞台化するために、何度も私たちと佐久間さんとデイス
カッションを行いました。私からお願ひしたポイントは「再
演できること」でした。兵庫と東京で計3回公演したのですが、
回によって役者もゲストも変われば、空間も変わる。ひとつは
神戸の「ジーベックホール」という割とフラットな空間。一方、
東京は北千住の「B.U.O.Y（ブイ）」という元銭湯をリノベシヨ

ンした劇場。かなり実験的な場所、会場に行くのに階段しかなかったり、舞台をささげる柱があったりと、アクセシビリティがよくないところであえてやったわけです。「そんな場所ですらできるかを考えたい」と佐久間さんと話していました。

作品は全部即興でもなければ、ワークショップの再現でもありません。この作品の主題は、田んぼの中で生まれたカエルが、最後に人間になっていくという物語です（解釈は人それぞれですが）。このような物語の「うっわ」をあらかじめ作っておいた上で、「どう表現していくかも含めて、いろんな可能性を考えていきたい」と思ったのです。それから、一つのダンスカンパニーのように、この作品が契機となって、「今後も新作を出し続けていけるかどうかを見ていきたい」とも考えていました。現状は、初演後1年が経った今も再演はできていません。再演がストップしていることに、いくつか課題があるのだと思います。一方で、ワークショップは今でも続いています。ひとつの形にすることの大変さは、非常にあるなあと実感しています。

長津…ありがとうございます。私は、この公演の東京公演を見せていただきました。先ほどおっしゃっていたYouTubeには全編が上がっているわけではないのですかね？

岡部…長いのでYouTubeではダイジェストをアップしています。もちろん全編を収録したDVDもあります。特に「BUY（ブイ）」の公演は、「各自が座ったところから、舞台の全部は見渡せない」という制約と魅力が混在しています。例えば柱が邪魔になって全てが見えないとか、そもそも障害があることで、そこで起こっていることの全部を見渡せないという状況が起きているのです。あえてそうした状況でダンス作品を作ったことが、全編を見ていただくとおわかりになると思います。

発表③ 西野桂子さん（NPO法人音の風代表理事）

西野…私たちは、地域に暮らす人々と音楽家をつなげることで、

音楽を通じた心の交流、社会福祉の貢献・推進を目指している団体です。2003年に設立し、2020年で17年目を迎えます。現在は110名のプロ・アマチュア音楽家ともに、毎月30〜40件の活動を行っています。主な事業に、福祉施設や学校へのアーティストの派遣、音楽ボランティアの派遣、ミュージックサロン、ミュージックフェスティバルの開催のほか、ROOMシアター京都のご近所にある「京都市岡崎いきいき市民活動センター」の指定管理者も務めています。

沿革をご紹介しますと、2003年に音楽愛好家10名で活動をスタート。その年に文化庁委嘱事業として「音楽ボランティア養成講座」を開催し、地域や福祉分野で活動できる音楽家の育成を始めました。このとき、社協（社会福祉協議会）との連携がうまくいったことで、福祉施設への積極的な情報発信を行うことができ、活動依頼が増えました。2004年以降は本格的に、地域の障害者施設や高齢者施設への音楽家派遣が始まりました。2019年の実績では、年間448件の音楽家の派遣依頼があり、その約3分の1が障害者施設となっています。

13年目を迎える

「スマイルミュージックフェスティバル」

西野…今日はまず、私たちが長年取り組んできた「スマイルミュージックフェスティバル」をご紹介します。出演者は、地域の障害がある個人、及び障害者施設利用団体の方々と、毎年平均8〜9組にご出演いただいています。知的障害があるグループが中心ですが、精神障害のある人、身体に障害のある人もいらっしやいます。年1回の開催が定着しているため、出演者の方はこの日を楽しみに、集中して練習に取り組んでいたという状況です。施設の方からの報告によれば、障害のある人は普段の音楽活動はあまり集中できないそうですが、本フェスティバルの半年くらい前になると集中力が非常に高くなるそうです。「モチベーションを高める意味でも、スマイルフェスティバルの存在が大切」と言っていたいています。また、普段は施設間の横のつながりを持つことが少ないため、福祉施設が一堂に会してつながるイベントは、地域のネットワークづくりに

おいても重要とのこと。出演者の方は、他グループの発表を見て刺激を受けることも多いそうで、来年は「自分たちもあんなことをしてみたい！」というリクエストが上がることも多いとか。互いの発表がよい刺激になっているというフィードバックもいただいています。

運営側である私たちの感想としては、現状は「出演者の発表会的」な要素が強いイベント」と捉えています。お客さんが純粹に音楽を楽しむというより、「発表会を見る」イベントになっていると思います。毎年の課題として、「お客さんにとっても見応えがある作品に仕上げるにはどうしたらよいか?」「お客さんがより楽しめるように演出を加えたらどうか?」という議論が行われるのですが、現状はまだ実現できていません。過去の話ですが、ある施設の方が「もっと音楽的な完成度を上げてから出演したい」とおっしゃったことがありました。一方、私たちの方では「その時のその表現を大切にしたい」という意見も上がり、互いの意見のせめぎあいとなりました。結果的にその団体さんは以降の参加を見送ることになったのですが、「どこまでを目標にして作品づくりをするか」というのは、どのグループも直面している課題のようです。



西野桂子氏

今日はこの他に、日々の活動の中で障害のある人と取り組んできた5つの事例を紹介したいと思います。

【事例1】和太鼓いちばん星

西野…「和太鼓いちばん星」は、知的障害のある青年たちによる和太鼓グループです。10年ほど活動をされた後、止むを得ず休止されています。このグループは元々ご自身たちで和太鼓を習っていたのですが、あるとき「自分たちが地域で活躍できる場を紹介してほしい」という相談で音の風に来られ、交流が始まりました。演奏される楽曲は本格的なもので、通っている和太鼓教室から楽曲の使用許可をもらった上で披露されています。和太鼓の技術向上のため、月2回、2時間みっちり練習をされています。そのため、演奏内容のクオリティも大変高いものに仕上がっています。彼らの目的意識も、自己満足ではなく「演奏を通して、より多くのお客さんを幸せにしたい」という思いを強くもっておられます。実際、彼らの演奏は大変好評で、多い時は年間10回程度のオフアートを有償でいただいています。

【事例2】障害のある20歳青年との音楽活動

西野…次の事例は、2018年から始まったアーティストの派遣活動です。月1回45分の活動を行なっています。この方は重度の障害のある方で、現在20歳でいらつしゃいます。支援学校を卒業される際に、居場所がなくなることを危惧されたお母さまより「息子が大好きな音楽にふられる時間を継続してつくてあげたい」と音の風に相談がありました。この方は目の瞬き以外、自分の意思で動かすことができません。そのため、瞬きを通してコミュニケーションを取っています。この方が好きなJ・POPも含め、幅広い楽曲を取り入れています。

また、お母さまからの要望で「聴音」の練習もしています。音当てゲームのような形で、ドレミの3つの札を用意し、いずれかの音をピアノで鳴らした後、答えの札を出したときにパチリと瞬きしてもらいます。これは、お母さまから将来「曲

作りができるようになればうれしい。家でも練習してみます」という要望でスタートしました。また、非常に楽器もお好きな方なので、楽器の紹介もしています。この写真はギターの弦にふれているところです。また、ご家族の方から「彼が自分で音を鳴らして演奏できるような仕組みはつくれないか?」と相談をいただき、サポートチームのメンバーにも相談しているところでした。つまり、センサーのような機器を通して楽器の音を鳴らす装置を作りたいと考えているのです。私自身はこの方面に明るくないので、専門家を頼りながら、彼が表現したい内容を表現できる環境づくりをしていきたいと思っています。

【事例3】ダンス&ミュージックワークショップ (4回シリーズ)

西野…事例の3〜5つ目は、私たちが2011年から指定管理を務めている「京都市岡崎いきいき市民活動センター」(以下「いきいきセンター」)の中で実施してきた活動例となります。いきいきセンターの指定管理を務める前は、「福祉と音楽」をキーワードに活動を進めてきたのですが、この頃からは、福祉の課題はもちろんですが、もう少し広い視点で街づくりをとらえ、「人と人、コミュニティの関係の中で音楽がどう機能できるか?」を考えて取り組むようになってきました。センターでの活動には「大学生生連携」(高齢者交流)「地域交流」(文化芸術交流)「市民活動支援」の5つの柱があり、ご近所にあるロームシアター京都のみなさんと連携事業もあります。演奏会の会場としてホールをお借りすることもあります。

このセンターを拠点に、地域の方々と楽しみながらできる音楽活動の提案をしてきたのですが、そのひとつが「ダンスとミュージックのワークショップ」。こちらは当センターが主催で、岡崎地域で行われた音楽祭「Okazaki Loops2018」の野外イベント(ParkStage)への出演に向けて行ったものです。ダンサー片岡左知子さんをお招きして、知的障害のある2名の青年との4回シリーズのワークショップを行いました。本番では、一人には演奏者として好きな楽器を鳴らしていただき、もうお一人にはダンサーと

して参加いただきました。同じ会場にいらつしゃったミュージシャンの方に「どうぞ入ってください」と声をかけると即興で演奏に参加してくださったり、小さな赤ちゃんが寄ってきて楽器を鳴らしたりと、楽しい舞台になったと思います。

【事例4】コミュニティ合唱

西野…当センターやロームシアター京都がある岡崎学区には、自治連合会が主催する「岡崎わいわい文化祭」という文化祭があります。当センターではこの文化祭の出演に向けて地域から幅広く出演者を募り、合唱の発表を行いました。募集の段階では、自治連合関係者や障害者施設、高齢者施設、子ども関連の施設をはじめ、ちょうど完成したばかりの京都大学の留学生寮にもお声をかけましたが、最終的に応募があったのは、障害のある人と高齢者のみとなりました。このとき、障害者施設の方から「地域交流を目的とした企画自体は素晴らしいが、事前に対象者理解をしておくべきではないか」とご指摘をいただきました。それで第1回目の練習時に、施設のセンター長さんから対象者理解の講義をいただいたことから、歌や振り付けの練習を行いました。障害を排除するのではなく、周りの私たちが受け入れる環境を作ること大切だと実感した出来事でした。

【事例5】ひきこもりの課題解決に向けた取り組み

西野…次の事例は、精神障害や発達障害により、生きづらさを感じていらつしゃる方々に向けた音楽活動の事例です。引きこもりなど社会参加に不安があり、孤立しがちな若者たちを対象に、プロのミュージシャンのサポートによって、月2〜3回の演奏練習を行った上で、ロームシアター京都のノースホールを借りてコラボ演奏を行いました。この時、一度も家から出ることでできず、練習もリハーサルも欠席された方がいたのですが、本番だけ参加できた方がいました。私たちは、事前にロームシアター京都の音響さんに「こういうことがありうる」と伝えておいたので、快く受け入れていただくことができました。本番では演奏だけでなく、ひきこもりの課題解決に向けた

トークセッション（意見交換）も行いました。現在は、この時の参加メンバーでレコーディングを行っています。自作の曲もカバー曲もあります。プロの音楽家のサポートを受け、より高いクオリティの作品づくりに励んでいます。

【質疑応答】

奥山…今回の勉強会では「ロームシアター京都がある地元では、今何が起きているのだろうか？」ということを知りたいなと思っていたので、やはり西野さんをお願いしてよかったです。と思っています。当事者の方ならではの関わり方が透けて見え、思わず笑ったり、ハラハラしたりすることもあり、興味深く拝聴させていただきました。特に、いきいきセンターの指定管理者になられてから、企画内容がよりコアになってきているのが面白いと思いました。

【第2部 みんなでロームシアター京都の課題を考える】

“みんな”が参加するのは難しい？

長津…今日のゲストは、私と奥山さん、ロームシアター京都のワーキングチームのみなさんと相談しながら決めたのですが、その際に「グローバルとローカル」というキーワードが上がりました。「長年全国で活躍されている方と、京都の地で長年活躍されている方の両方をお招きできるというよね」と話していたんです。まさにそういうお話をうかがえたと思っています。

永山さん、岡部さんのお話では、やはり「作品づくり」がキーワードだったと思います。ロームシアター京都の「インクルーシブなコンテンツを考える」という課題において、「障害のある人の日常や行為を舞台にどう持ち込むか?」「逆に舞台上に乗せられないことがあるとすれば、それは何なのか?」を考える

有意義な時間になったと思います。

西野さんのお話は、ミュージシャンであられながら、福祉色が強い活動をされていることがすごく面白いと思いました。社会課題に対して福祉のリアルな現場にいる人の頭の使い方、つなげかたを普段からされていることが素晴らしいと思います。西野さんのご活動は、作品・舞台づくりよりも「日常に芸術がある場をつくる」ことに力を注いでいらっしゃる。その対比も興味深いと思いました。

ここからは、今日の勉強会を主催されたロームシアター京都のメンバーを交えて話していきたいのですが、次年度以降のロームシアター京都の事業で「インクルーシブな企画」に取り組みたいと思っている一方、実施に向けたハードルや不安も多しとお聞きしています。今日は、当事者の方々の根本にある想いを整理していただいていますので、そこから議論の口火を切っていただきたいと思っています。

宮崎麻（ロームシアター京都）…ロームシアター京都は「公演事業」が主体の公共劇場です。今回の企画は「公演に来づらい人、来たいと思っても来れない人がいるよね。もっと多様なお客さんにきてもらうのはどうしたらいいのだろうか?」というディスカッションから始まりました。議論の中で「アウトリーチ（出張サービス、出張ワークショップなど、劇場側から外へ向いていくこと）の可能性もある」「劇場の外に出る前に、公演に参加したい人がいるかもしれない」など、さまざまな意見が上がった結果、まずは「多様な人々が参加できるコンテンツを考えてみよう」という動きになりました。

ただ、こうした試みを行う際に「毎回、ワークショップの参加者が固定してしまうのではないか」「公演や発表会を見に来られるお客さんが、保護者や近親に近い方ばかりになってしまわないのか」という壁にぶつかるとは思わないだろうか、そのことをどう捉えればいいのかと悩んでしまっています。

永山…ワークショップの参加者が固定してしまうのは、別にいいんじゃないでしょうか…（笑）。広島でも毎年舞台を制作

していますが、すぐに本番ではなく、誰でも参加できるワークショップを必ず1回行っています。すると過去に参加された方も、新規に応募された方もやってくる。大体8割が常連さん、2割が新規の方という感覚ですが、それでいいんじゃないかと思うのです。常連の方が核になって、その活動が定着化していけばいいのではないかと。インクルーシブな活動は決して1つのホール、1つの劇場で完結させるのではなく、「ある種のモデル」としてやっていくしかないのだと思います。

理想をいえばすべての地域でこうした試みができればいいけれど、それを言い出すと障害者だけではなく、市民全員にとって「地理的に劇場に遠い人が存在する」という不平等が起こりうる。ロームシアター京都においても「劇場に近い人しか参加できない」という不満が上がりかねません。だから、私たちのような活動がある種のモデル、象徴的な事例としてコツコツ積み重ねていくことが大事で、それがやがて大きな変革へつながっていくと考えるべきではないでしょうか。そもそもワークショップでは、マスを相手にすることができない。逆にいえば、その小さきこそが私たちが担うべき部分ではないかと思えます。固定よりも重視すべきは「継続」だと思えますね。1〜2割でも新しい人が入ってくることを前向きに捉えればいいのかではないでしょうか。

岡部…私も永山さんとほぼ同じ意見です。継続することが大事だと思えます。参加人数はあまり関係なくて、「来てくれた人と、どれだけ内容を深められるのか」を考えればいいのかと思えます。それから、ロームシアター京都だからこそのやれることが、実はたくさんあると思います。アウトリーチを考えるにしても、京都には他都市と比べて流通もリソースも充実している。めちゃくちゃ羨ましいと思いますし、そこにも可能性があると思う。それから細かいことですが、インクルーシブな事業の担当者がごろごろ変わると、参加者さんは行きづらくなってしまいうことがあがる。専門的な知識がなくてもいい、1人の人が想いをもって参加者を出迎えてあげる、来られた方が安心できる環境づくりが一番大事だと私は思います。

「顔が見える劇場」を目指して

西野…ロームシアター京都のすぐ近所で仕事をしている自分の感覚としては、ロームシアター京都は「文化芸術に特別な関心がある人しか行かない場所」というイメージがあります。いきいきセンターの利用者さんも「行く用事がない」と思っている人が多いようです。僻地に住んでいるファンの方は「こんなに恵まれた環境なのになぜ？」と思われるかもしれませんが、楽しいイベントもいろいろあるから、利用者さんに紹介したい思いは強いけれど、「近いのに遠い」という心理的な距離感があります。

いきいきセンターの利用者さんは、インターネットやSNSではなく、紙媒体から情報を仕入れる層が中心です。興味があっても、今ロームシアター京都で何が起きているかを知る術をあまり持っていないんですよ。そういうこともあって、近くて遠いと感じるのかもしれない。

長津…公共劇場ですから「みんなのための場所」という公共性は大切ですよ。いろんな立場の人がいるなかで、それぞれにとつての使いやすさをどう獲得していくか。

小倉（ロームシアター京都）…いきいきセンターは二条通に面したところに事務所があって、天気がいい日は窓を開けて仕事をされている。私も昼休みに通った時、ちらりとスタッフさんの顔をのぞけたりするんです。一方ロームシアター京都の事務所は、少し離れているので、「そういうえば、来られてましたよね」という距離感になってしまう。館が大きい分、「ちよつと立ち寄った感」は生まれづらいかもしれません。

岡部…毎年、岐阜県の可児市の「可児市文化創造センター」で展覧会を行なっているのですが、こちらのフリースペースがいい感じなのです。高校生もお年寄りも、みんなが自由に使っている。何をしても絶対に追い出さない、ああいう雰囲気がいいなと思う。あの場所があるからこそ、いろんな公演が受け入れられている気がしています。この会議室がある外の空間

（パークプラザ3階）はフリースペースですか？

奥山…そうですね。1階のスターバックスで飲み物を買ってきて休憩してもいいし、飲み物を買わなくてもいい。勉強してもいいし、本を読んでもいい、そんな場所です。

小倉…こちらのスペースの利用者もかなりのびのびされていますよ。中学生がソファに寝転んでゲームをしていたり、ここで仮眠をとったり。

奥山…ロームシアター京都は、前身の「京都会館」時代が長いので、市民にとつては貸館の印象がとて強いんですよ。パレエの発表会とか定期演奏会とか、何かしらの目的で毎年この会場を使っているという方はかなり多いのではないかと思います。福祉関係の方も大きな会議の会場としてここを使っています。そうした「とても身近な貸館」としての印象と、ロームシアター京都に生まれ変わってからの「自主事業」の印象の間に、かなりギャップがあると思うのです。だから今のロームシアター京都が「多様な人たちと芸術をつないでいきたい」という想いをもっていることを、公演以外の自主事業や、施設内のいろんなところから伝わっていくといいのではないかなと思います。

永山…貸館を利用される方は多いのでしょうか？

小倉…メインホールは約2000席ある大ホールなので、ポップスやクラシックなどの音楽のイベントが多いですね。例えば有名アーティストのライブなど。中規模のサウスホールは、奥山さんもおっしゃったように京都はバレエ教室や舞踊団も多いので、そうした発表会が行われることもあります。貸館担当者のスタッフは熱心に仕事に取り組み、利用者顔が見える距離で奮闘しています。

齋藤（ロームシアター京都）…ただ、他の劇場の事例と比べると、ロームシアター京都は「劇場としての総体がかみづら

な」という印象もあります。この議論をするには、「劇場とはそもそも何か？」「インクルージョン（包摂）」といつても、どこに包摂するのか？その母体となる対象は何か？」について語らなければならぬとも感じます。もし、既にあるものに包摂するだけなら、アクセシビリティの向上だけで良いかもしれませんが。奥山さんも先ほどおっしゃっていましたが、ロームシアター京都はお金さえ払えば誰でも借りることができます。よっぽどのことがない限り、断ることはありません。ということは、この部分に関しては「公共施設としては十分インクルーシブになっている」と言える。もちろん、会議室の値段をもう少し下げた方がいいかなど、価格の議論はあるかもしれないけれど（笑）。私が大切だと思うのは、「この劇場が芸術性をもって実現しようとするプログラムの中に、どういう多様性を存在させるか」を考えて続けていくことだと思います。包摂ということ自体が非常に多面的なので、それをどう整理していくかが重要になってくるでしょうね。

芸術を、市民の生活に取り戻そう！

齋藤…岡部さんのご活動は、福祉活動においてアーティストティックな面白さを探求されている点がとても興味深いと感じています。その一方で、2013年から2014年頃に私がたんぼぼの家にお伺いした時に、理事長の播磨さんが「たんぼぼの家の活動の根幹にあるのは、市民活動である」とおっしゃっていたことがずっと心に残っています。行政ではなく、「市民の手で立ち上げた活動である」という自負は、現在のたんぼぼの家のアート活動にどのように反映されているのでしょうか？播磨理事長のお考えは、今も変わってはいないのですよね？

岡部…私たちの活動の根本は「アートを通じた表現活動」であり、劇場でも劇団でも、ダンスカンパニーでもありません。施設にいる人たちの中で湧き上がってきた「やりたい」という思いが形になっていったのが現在の姿だと思います。ダンスをしたいから、演奏をしたいからこの人を呼ぼう、という風に自分たちで考えて意思決定をして、外部の方に声をかけています。

最終判断はすべて自分たちで行なっているんです。ディレクターも表現者も外部の人が関わっているけれど、あくまで自分たちが伝えたい、やりたいことをベースにしている仕組みは創設の頃から変わっていない。時代によって、そのアウトプットが音楽祭であったり、ダンスであったりするだけで。すべての発端は、ここにいる人たちから始まっています。

齋藤…なるほど。たんぼぼの家の場合は、「市民」の意味を、集合化市民ではなくて「主体性」に置き換えて捉えているのですね。

岡部…そうですね。今日は概略しか紹介できませんでしたが、たんぼぼの家では市民演劇も行なっています。もちろんこれも「利用者たちのやりたいという想い」からスタートしています。

齋藤…となると、たんぼぼの家では「市民が」という主語は、「全市民が（みんなが）」ではない瞬間があるわけですね。「関わっている人だけ」「見ている人だけ」という風に限定される部分が、局面ごとに出てくるわけですね。それでも「市民活動だ」という、一種矛盾しているようにも思える部分をどう乗り越えていらつしやるのでしょうか？先ほどの「参加者が固定化される」という議論にも似てくると思いますが…

岡部…それは、「どの時点で活動を社会化するか（普遍化するか）」を考えることに尽きると思います。最初は障害者のための活動だけれど、続けていると、決して障害者のためだけではない側面があることに気づく時がやってくる。永山さんもおっしゃっていましたが、「障害者が一生懸命がんばりました」ということを伝えたいのではなく、今生きているすべての人に共通する想いや表現があるから作品化しているわけで、それを現代の芸術表現として見せていく。そのポイントを超えないと作品にならないし、ただの自己満足で終わるのだと思う。作品性に関わる議論でもありますね。自分たちの活動を、小さく狭いコミュニティの中で発表すること自体は否定しません。でもその先に進んで、「舞台作品としてどうなのか？」という批評の狙

上に乗せる覚悟を持つたり、もっと外に開いて「自分たちをまったく知らない人たちに、どこまで伝わるのか？」を真剣に考えない限りは、社会化はできないのだろうと思います。

齋藤…なるほど。先ほどの永山さんの話にあった「8割の参加者が固定されたっていいじゃないか」という考えの先に、活動を普遍化、社会化できる可能性があると信じているから、公共劇場でやるべきだという考えにつながっていくのですね。

岡部…おっしゃる通りです。たとえば参加者がひとりふたりでも、活動を掘り下げていけば、彼らを全く知らない人々にも響く表現につきあたるだろう、そこまでやりましょうという想いでやっています。あくまで舞台作品の場合ですけれど。ワークショップとは価値観が違うので。

長津…社会化するには、「何を社会化するのか？」「いつ社会化するのか？」の2つのフェーズがあると思いました。社会化には、市民の障害理解を深める側面もありますが、岡部さんと齋藤さんが考える社会化は、「障害者の日常や環境を、普段とは違う軸に置き換える（見せ変える）」ことで、普遍化していく試みなのだ」と感じました。

岡部…私は、障害者理解の手段として作品づくりをしない方がいいと思っています。「社会の中で時代に問いたいことがある。だから舞台を作ります」のように、シンプルな目的であるべきだと思います。そこに多様性や障害のある人が自然と入ってくる形ではないのか？。そのためには、「ロームシアター京都として何をしたいのか？」という考えをはっきり持つておくことも必要だと思う。ロームシアター京都にはたくさんネットワークがあるので、いろいろな人に声をかければすぐにそれらしい作品が作れると思います。でも、それでは何も残らない可能性がある。どのように考えて、どういうプロセスを踏んでいくかという過程が大切だと思う。

永山…私は、今は市民活動の対極に芸術があるような気がして

いますね。芸術は高尚で自分たちから遠いもの。一方、市民活動は自分たちに近い存在というように。この文脈でいえば、私たちの活動は「芸術を、市民の手に取り戻すための活動」と言えるかもしれません。「取り戻す」といったのは、元々自分たちがもっていたにも関わらず、失ってしまったという想いがあるから。宮崎県を例にするなら、古代の神楽や神事が芸能の始まりだったと思う。でも現代では、芸術は1年間の暮らしとはまったく関係ないところに存在している。それを市民活動によって、自分たちの日常の暮らしに取り戻していくことが、もしかしたら公共事業の使命なのかもしれません。

このとき「今、芸術とされているものは本当に芸術なのか？」を問い直す必要があると思う。「楽器を上手に弾ける、絵を上手く描けるといふ価値基準は本当に正しいのだろうか？」「音楽とは何か？ダンスとは何か？俳優とは何か？」障害云々ではなく、すべての優れた作品は「問い」を内包していると思います。その議論なしには、芸術をもう一度市民の暮らしに取り戻すことはできないと思うのです。その意味で、「障害者」は芸術を語り直す上でわかりやすい存在になっているのかもしれないですね。演劇は「正しくセリフを覚えて言うもの」だと思われているけれど、障害のある人と一緒にやったら、絶対にいいタイミングでセリフは出てこないし、ましてや何を言っているか分からないこともある。岡部さんが先ほど「佐久間新さんが、参加者が『見ているだけでもダンスである』と言って、ダンスの間口を広げてくれた」と話していましたが、間口を広げることが結果的に、市民に芸術を取り戻す手立てになった気がしています。市民活動としてやるのならば「芸術作品を作ります」ではなく、「芸術の枠組み自体を問い直す」ことが同時にあるべきだと思う。そうしないと、新たに市民からかけ離れた芸術作品が生まれるか、ただの市民活動で終わってしまうのではないか。芸術と市民は、永遠に繋がらないままだと思います。

長津…アートマネジメントを研究してきた私の立場からすると、西野さんのご活動は市民活動スレスレの、市民活動に見えらるともアーティスト的な切り口だと思いました。作品を作ること以上に、コンテクストを作るとか、芸術の幅を広げる

ような企みを加えていらつしやる。一方で、ロームシアター京都がそういうところに踏み込んでいいのか、果たして公共劇場としてやるべきことなのか、という問いが生まれているようにも思います。

岡部…今日の話聞いて、ふと「こんな場所があつたらいいな」と思ったのですが、貸館で借りている団体同士をミックスしてみる、交流させてみる試みはどうか。隣は何をする人ぞ」とみたいな感じで、異ジャンルの団体の交流会、食事会などの場を提供して、自分たちとは違う表現を楽しく知る機会になれば面白いのではないかなと思つたんです。貸館で、生け花からダンスまで、普段は絶対に混じり合わない人たちが壁を隔てて集まっている特殊な空間ですよ。そうした多彩な人が集まってくるのが、ロームシアター京都の財産であり、その価値を高められたらいいのではないかと思つたんです。福祉の場合は、比較的いろんな活動をしているので異ジャンルの人々が混ざりやすいんです。でも趣味でお稽古に通っている人たちは、たぶん横や外へはつながらないのでないかな。そこを館自体がミックスすることで、風通しがよくなったり、互いの発表を鑑賞しあつたり、新しいコラボレーションが生まれたりするのではないかと思つた。

インクルーシブな舞台表現の「評価基準」とは？

宮崎麻…私から、もうひとつ質問させてください。インクルーシブな舞台活動において、芸術性を見極めるポイントはどこにあるのでしょうか？ 先ほど「市民活動スレスレ」という話も上がっていましたが、「これこそが、市民が求めていたものである」という判断基準みたいなものは、果たしてあるのでしょうか？

長津…私個人としては「批評の不在」の議論につながると思います。例えば、『だんだんたんぼ』のような作品について、現状では何がどう良かったかを明確に語れる人（批評家）の不在があり、「何がどう良かったか」を語る言語の不在という問題と密接に関わっていると思うんです。一般的な芸術活動は、歴

史がどう評価してきたかとか、その作品が歴史や文脈にどう位置付けられるかによって価値が見出されてきた側面があると思うんです。その一方で、京都に限っていえば、権威による評価を気にすることなく、ワイワイみんなが集まって「これは良かったね!」「全然ダメだったじゃん!」みたいに、気軽に言い合っている環境がある気がしていて、側から見えてうらやましいなあと思います。

奥山…確かに京都では、権威による批評だけで全部の価値が語られる感覚はないですね。口コミのような形で盛り上がって、みんなが集まってくるのがよくある気がしますね。コミュニティ的な盛り上がり方、といつていいのかもしれないんですが。

長津…たんぼの家では、障害のある人のアートを評価するために、新しい指標づくりに取り組んでおられて、それを新しい「ものさし」と呼んでいます。それがとてもいいなと思うんです。世間の芸術批評的なものさしは、マジョリテイが決めたひとつの指標に過ぎなくて、「自分たちは、それとは違うものさしをもっている」ということを、しっかりと打ち出していらつしやる。いきいきセンターも同様で、西野さんのお話を聞いてみると「この活動っていいよね!」と言っている参加者さんの顔が具体的に覚えてくる気がするんです。

肯定する人がひとりでもいい、と私は思います。その活動が「自分にとっての居場所になる」と確信している人がひとりでもいれば、きつとうまくいくのだと。

岡部…ものさし自体の多様さをどうつくるかが、一方でとても大切だと思つています。いわゆる世間の批評だけを頼りにしてはいけないと思つています。私たちの作品は、よく「批評しづらい」と言われるのですが、その理由の1つは、障害者があることでバリエーションが広がってしまうことにあるのだと思う。それから、批評家たちは継続しない作品をあまり評価しません。普通の劇団は、新作を次々と作って更新していくから、前後の文脈やその時代の演劇シーンもふまえて批評することができけれど、単発でボンとつくったものは、たまたまいい出来だった可能性も

否定できないので、どう評価していいかわからないようです。

齋藤…先日別の勉強会で長津さんが「障害者文化芸術活動推進法」の中に、「芸術上価値の高いとされる」という文言があるとおっしゃった。そこに見合う作品を作るのが一番安易なのだろうと思いつつも、私は「多様である」とか「包摂性が高い」ということはすなわち、永山さんがおっしゃったように「内包されている問いの豊かさ」につながるべきだと思うし、それこそがおそらくこの劇場でやるべきことなのだろうと思います。

岡部…ロームシアター京都が実践するなら、「ロームシアター京都が思う芸術性ってこうなんじゃないか?」という議論を中や外で広く行つて、そのプロセスを社会に共有していくことが大切ではないかと思つました。

長津…ロームシアター京都では、現状は芸術監督が置かれていませんよね。芸術監督がいることで「芸術性」に対する考え方が明確になりやすい一方で、多様性の話をする場合は、その芸術監督が求める「芸術性」とのせめぎあいが生まれることもあると思うんです。だからこそ職員のみなさんと議論を深めていくことが重要だと思うし、職員の力でフレキシブルな議論を喚起していくことが重要なのだと思います。

市民それぞれが「批評性」を獲得するために

小倉…ワークショップと公演の違いについて話をおうかがいしたいです。ワークショップは参加する人のために内容を考えていきますが、公演となると、芸術性の議論にもつながりますが、「観客がどう見るか?」という視点がすごく大きくなりますよね。西野さんは「スマイルミュージックフェスティバル」は発表会にとどまっている」と指摘され、永山さんは「障害者ががんばった」という評価で終えたくない」とおっしゃいました。「あって障害者ではない配役にする」ですとか、「批評という俎上に乗せていく」という話もありました。みなさんは、ワークショップと公演は大きく何が違うと考えていらつしやいますか?

また、公演を「誰のもの」だと考えて作品づくりをされているのでしょうか？

永山…基本的に、ワークショップと舞台公演は違いますよね。ワークショップも舞台公演も、それぞれが果たすべき役割があると思う。どちらも、やるんだったら腰を据えて継続していくべきです。5年、10年くらいの覚悟をもってやらないとダメ。ちょっと試しにやってみるだけでは、先ほどの話と一緒に、芸術活動と市民活動がますます乖離する要因になる気がしています。

ワークショップは体験してもらうことが大切だから、参加しやすさも丁寧に考えています。もちろん、そこで興味を持ってもらって「舞台に立ってみたい」という想いを引き出したいとも思っていますが。一方で舞台は、本番までに必要な稽古時間を伝えて、「稽古に参加できるか？」と条件を突きつけるわけですから、取り組む側の姿勢も全然違いますよね。とはいえ、初めて舞台に参加する人は、作品がどうやって生まれるか分からないわけですから、乱暴にいうと私たちを信じてもらうしかないんですよね。実際に稽古をはじめてみると、今度は「そこまでは無理だ、できない」という人が出てくる。逆に舞台には出たいけれども、体調の問題で難しい人も出てくる。その場合「当日、この5分だけやりますか？」と声をかけることもあります。

演出家の立場からアーティストたちに言いたいのは、「演劇とはこうあるべきだ」という自分のルールや枠組みを強く持っている人には、インクルーシブな演劇は難しいと思います。「この人が出たがっているけれど、当日しか来られない。では、どうすればこの人を舞台で成立させられるか？」みたいな課題にフレキシブルに対応できる人が向いている。とにかく、アーティスト側が鍛えられる現場です。自分がこれまで築いてきた枠組み、考え方を問い直すことを喜びと感じられない限りは難しいでしょうね。年齢は特に関係ないとは思いますが、アーティストが比較的若い時期にこういう試みに参加してもらう方が、変化にも対応しやすいかもしれません。

おそらく一度「演じる」ことを経験した人のものの方見方は、明らかに以前と変わって来ると思っています。それから公共性の話

でいえば、「市民がみんな批評家になつたらいい」と私は思うんです。それぞれの立場やものの方見方で、自由に意見を表現できるのが豊かな社会だと思う。「私はこう思う」「私はこう考える」という、いろんな人の声が集まったときに、初めて活動の全容が見えてくるのだと思う。今はどちらかといえば、声の大きい人が言った意見で決まる側面が多いですよね。芸術活動においてはそれでも構わないと思うけど、「市民の」という前提をつけるならば、市民の誰もが自由に意見を表明できる環境をつくっていくことが大切だと思う。もしかしたら、自分で一度舞台に立ってみることでそれがわかる人もいるかもしれない。人によっては、その手段は「絵を描いてみる」とか「かもしませんが、個人がそれぞれの表現手段を手にしたときに初めて、自分の立場から意見が言えるようになったり、お互いの意見を聞きあったり、相手に耳を傾けるようになるかもしれない。声の大きい人がワツといったことに対して、反応しないままにならない気がする。そういう環境を作っていくのが、公共劇場の役割なのかもしれない。

齋藤…今の永山さんのお話の続きになるかもしれないですが、ロームシアター京都である作品が上演されたとする、「おそらくこの角度から、作品を見るだろうな」という客層しか、その作品を見に来ないんです。私たちが作品性が高いと思っている自主事業の公演に、とにかく人が来ないんです(笑)。結果として「ロームシアター京都でやっているから見にくる」という人の割合はごく少なくて、「この作品だから見にくい」という人が大多数なのだろうと思います。市民がいろんな作品に出会える機会は、絶対に高いはずだからこそ、この環境をうまく利用すれば、市民による批評の多様性につなげられる可能性もある。そのポテンシャルを私たちがどうつなげていくかが課題なのではないでしょうか。

劇場とお客様の距離の縮め方

永山…私が活動拠点にしている三股町は人口2万5000人の町です。この町で毎年、「まちドラ」という町民参加の市民

劇をやっています。毎年30人くらいの方が参加してくれるのですが、毎回、近所のおじいさんやおばあさんが私のところに来て「今年はようわからなかったわ!」とか、素直な感想を言ってくるんです(笑)。小さい町だから、こういう反応が目に見えやすいんですよね。「この劇場でやっているから」「永山がすごく面白い」といつていたから、よくわからんけど目に来た」みたいな近い距離感が、市民と劇場の間にあるのだと思います。

ロームシアター京都の3階のパブリックスペースで勉強している子どもたちと、みなさん一人ひとりがどう出会っていくかは、意外と大事な話になってくるのかもしれない。三股町の文化会館の職員は5〜6人くらいしかいなくて、窓口と事務所は一応パーテーションで仕切られているのですが、なにも等しいくらい感じですね。劇場では、毎週木曜日の17時から「みまた座」という小中高生対象の演劇ワークショップを行なっているのですが、ほとんどの子どもたちは「ただいま!」といって、まず事務所の中に入って来るんです。私たちに声をかけてくるし、事務所が彼らのたまり場になっている。だから、職員も子どももお互いの名前を覚えるようになる。最近是不登校の子も多いので、学校は行かずに劇場にだけくる子もいます。「小さい町だからできる」といえばそれだけのことで、劇場と市民のようなマスの関係ではなくて、1対1の関係を丁寧に築いていくことが、本来的な劇場のありような気もしています。

市井の人々の日常や暮らしの中に入っていくことは、責務や義務としてやろうと思うとしんどいけれど、一個人としてふらっと市民と関わっていくことは財産になると思うんですよね。誰もが、自分の家の冷蔵庫の中身を知らない、今晩おいしい料理をつくるのができないでしょうか? どこから高い食材を仕入れることも大事かもしれないけれど、基本は自分のとこの中身が大切。劇場もそれと同じじゃないかと。この町にどんな人が住んでいるのかを知って、その人たちと何ができるのか、どんな料理ができるのかをワクワクしながら考えてみる。それが一歩になるのだと思う。

宮崎麻…ロームシアター京都は、「世界水準の作品を上演している」という自負があります。だからこそ、この町の人に一番見

てほしいんです。近距離で世界を感じられる場所なので、今の状況が本当にもつたいないなど。京都の友人に「（ロームシアター京都）は、勉強していかないと行っちゃいけない気がして」と言われた時はショックでした。そんなことはないのに……。でもそう思われているとしたら、そう思われない努力をしないとイケないですね。

永山… 大多数の人にとって、芸術ってそんなものじゃないかな？「芸術は遠いものだ」という感覚があるのだと思う。その前提をくつがえしていかないとね！芸術市民活動のようなかたちで。

西野… 私たちの活動は、そもそも市民活動なんです。ターゲットにしているのは、音楽をしたことがない人たち、もしくは潜在的に関心がある人たち。無関心層も含めて考えています。逆に、元から音楽が好きなたちは、自発的に行動を起こされまですので、あえて私たちがアプローチする必要はありません。一方で、先ほどの劇場の話と同じで、私の周りもプロの演奏家だらけなので、なかなか周りの人がコンサートに来てくれないという悩みは共通しています。「勉強しないとわからない」と、当然言われるわけですね（笑）。

でも、ある時スマイルフェスティバルの曲選びで、あるミュージシャンがマニアックなブルースの曲を提案したことがあります。「実はこんなカッコいい曲で、ライブハウスではこんなアレンジをして演奏しているんですよ」と熱弁していると、次第に音楽や曲自体に興味を感じてもらえるんですね。「ほな、あんたがそういうんやったら、一回ライブハウス見に行こか？」みたいなことも起こりうる。音楽に対する無関心層や関心があっても具体的な行動を起こせていない人に対して、私たちは直接的にアプローチができるのが強みだと思う。結果的に、ロームシアター京都の活動に関心を持つ人を育てられるかもしれない。

多分、ロームシアター京都と私たちは、それぞれ違う役割があるのだと思います。例えば、地域のみなさんに向けて、ロームシアター京都の先駆的な活動をかみくだいたワークショップ

をこちらで主催してみるとか。ロームシアター京都から、アーティストを何人か紹介いただくだけで、私たちがロームシアター京都と市民を繋げるお手伝いができるかもしれない。お互いの得意分野を生かし、役割を明確にしながら協働したら、きっと面白いことができるのではないのでしょうか。

長津… 役割が違っておっしゃいましたが、西野さんにとってロームシアター京都はどんな存在なんでしょうか。

西野… 私たちにとってロームシアター京都は、一流のプロが集まる憧れの場所であり、人材の宝庫だと思います。ロームシアター京都の豊富な人材の力を借りることで、自分たちの普段のコンテンツをより魅力的にできると思うし、結果として、利用者さんたちを一層輝かせることができるのではないかと期待しています。お互いに協力しあえたらいいな、と以前から思っていました。市民活動のグレードをぐんと高められると思うので。

長津… 今あるコンテンツ同士でコラボするのも良いですが、一緒に一から作り上げていくのもいいかもしれませんね。また、西野さんが「寝たきりの方も音楽を演奏できる仕組みを作りたい」とおっしゃっていましたが、たんぼぼの家はIoTなどのテクノロジを使って、一人ひとりのニーズに対してカスタマイズしたものがづくりする、いわゆる「デジタルファブリケーション」の分野も得意とされているんです。たんぼぼの家では、一人ひとりの利用者さんに向けて、「この人にはこれ」「この人にはこれ」という個別の提案ができていくのがいいですね。時々それらをミックスすることで、さらに面白い化学反応がうまれているのだと思います。

奥山… 岡部さんは以前「現代のテクノロジを活用すれば、何でもできるのではないか」とおっしゃっていました。ロームシアター京都も、市民一人ひとりの声がきっかけになって、これから大きく変わっていくかもしれませんね。市民の声だからこそ説得力があるわけで、一人ひとりの想いが大きな力になるの

だと思っています。

オブサーバーから

「着地点をどこに求めればいい？」

山口（ロームシアター京都インターン）… 劇場が芸術性を高めれば高まるほど、憩いの場でくつろいでいる人や、ゲームをしている子どもたちが、ここに来づらくなる状況が生まれてしまっているのではないかと、それをどう捉えたいのだからかと考えてしまいました。それから、劇場に障害を持っている方がたくさん来るようになったときに、それを受け入れられない人たちが出てくるかもしれないなど。多様性に軸を振っていくなかで、障害を持つていない利用者がぐっと減って、障害のある人がぐっと増える交点があるような気がします。それを乗り越えるにはどうしたらいいのか、乗り越えたとしてもそれは果たしていいことなのだろうか、と考えさせられました。

長津… この冷蔵庫の1段が全部、障害者のことになっちゃったとしても、あと8段は残っているのになあと思います。もちろん「障害者が来る場所は、私の居場所ではない！」という人、「障害のある人も参加するワークショップだとは思っていなかった！」という人は、必ず出てくるでしょうね。

永山… おそらく、全ての人から受け入れられる場所というものには存在しません。でも、「ここには一生来ないだろう、来たくない」という考えの人がいたとしても、それがイコール「この場所の存在が許せない」というわけではないと思うんです。「自分は興味がないし、行かないけれど、そういう場所があることは認めるよ」という立場であれば、十分いいんじゃないでしょうか。劇場を遠い存在だと思っている人のために、今日議論したような取り組みがある。その開いていく過程の中で「じゃあ私は行かない」という人が出てくるとしたら、もうしょうがないと思うんですね。なんだか今日は「しょうがない」ばかりいっていますねえ（笑）。

奥山・西野さんたちは、私たち市民の代表でもあり、たくさん市民に近い距離で活動されている貴重な存在です。ロームシアター京都で専門技術を持っている職員は、なかなか市民の日常にまで深くアクセスすることは難しい。でも、西野さんを通して、市民の考えやニーズを理解することで、今市民から求められていることに気軽に応えることができるかもしれない。本当はゼロから進めなければいけない課題を、西野さんと一緒に進めることで何マスか先へ一気に進めることができると思います。さらに、西野さんはご自身がアーティストで芸術理解が深い方ですから、「ロームシアター京都に参加しているアーティストはこんな人たちなんだよ!」という風に、頼れる伝達者になつてくださる気がします。徒歩圏内で、こうした環境に出会えることは素晴らしいことなので、このリソースを活用しない手はないと思うのです。

一方で、「たんぼの家」の活動がすごいなと思う点は、いろいろなプログラム、プロジェクトを手がけることで、常に社会のいろんな層にリーチされていることだと思います。ひとつの企画だけでは全方位的な網羅はできないけれど、この企画ではこんな人たち、こっちの企画ではこんな人たちという風に、少しずつ積み重ねていくことで、できるだけ多様な人たちと出会い続けるプロセスを実践されていることが素晴らしい。ロームシアター京都の場合も、ひとつのプロジェクトで目標を達成しようとするのではなく、いくつもやってみることで、全体の目標をつかんで達成していけるといいなと思いました。

長津・今日は充実した議論ができたと思います。永山さんの「冷蔵庫のはなし」も面白かったですね。ロームシアター京都という冷蔵庫に今何が入っているのか、私自身ももっと知っていきたいと思いました。貸館事業があることで十分に公共的だから、「そこを横串でつないでいこう」という岡部さんのアイデアもとても良いと思いました。市民と向き合う際に「目の前のひとりから始めよう」という提言もありましたが、その最初の一人は西野さんがふさわしいのかもしれない。

3階のパブリックスペースが高校生たちの居場所であるように、既にあるものをどう活用していくのか、育てていくのかと

いう話、市民一人ひとりが批評していくことが、この劇場の伸びしろであり、関わりしろ（自分から関われる余地がある場所）であるという展望が見えた気がしています。やっぱり「顔が見えるスタッフ」がいることも大切で、今日がその一歩になるといいなと思います。

今日のさまざまな議論を良い形でアウトプットしていけるといいなと思っています。たくさん議論やご提言をありがとうございます。

※一部編集の上、掲載しております。